熊本学園大学 外国語学部 第06号
英米学科GAZETTE

平成29年7月
発行・編集
熊本学園大学　外国語学部

巻頭言

「聞く」ということ

外国語学部長　矢野　謙一

「外国語学部」と言うとすぐに「喋る」ことが頭に浮かぶらしいが、「聞く」ことはほとんど注目されない。外国語を聞くことは、集中力がいる。話し手は声の大きさで存在を示し、論理で意思を伝達する。聞き手はそれに対して、発言を聞き、その人が存在を示しているだけか、発言に論理があるか注目する。また発言者は、無意識に表情で発言とは別の意図を伝える。これを同時に聞き取り、読み取る。これが外国語を聞き取る行為である。単語や表現が文法規則で組み立てられた、結果を追うだけではない。日本語でも同様である。例えば、首都の知事は、塗りが厚いので筋肉の動きは読めないが、目の動きは特徴的である。目が動いてないとき、話は要点でない、目を大きく見開いたときは本音、目を上にあげると考えが定まっていないようである。明確に意思を伝達したくないときは、英語が混ざる傾向がある。首相も米大統領にも無意識の動きがある。それを読めるとニュースが楽しくなる。

英米学科の最新ニュース

6月11日（日）に、本学で保護者懇談会が行われた。英米学科では35名の参加があった。矢野学部長が外国語学部の特徴を、学科長が学科の教育方針をそれぞれ約30分ずつ説明した。その後個別面談も行われた。主な問い合わせ内容は留学や就職に関してであった。

★8月1日から約三週間、米国ミネソタ州Bethel大学に17名の学生が海外研修にでかける。また8月6日から約一ヶ月、英国セントラル・ランカシャー大学に7名の学生が研修に行く。

★8月15日～22日の期間、海外就業体験プログラムで学生5名が香港に行き研修を受ける。

研究紹介

外国語学部英米学科講師　渡辺　拓人

私は、英語史、つまり英語という言語の諸相を歴史的に辿る分野を専門としていますが、その中でも特に、近接未来を指す表現の発達に興味を持って研究しています。

当初は、「文法化」と呼ばれる言語変化のパターンに重点を置いた研究を行っていました。文法化とは、具体的な意味を持っていた語句が、時代と共に文法的なものに変わる現象のことです。たとえば日本語の「ところ」の場合、「場所」という語源的意味にとどまらず、「今帰ったところだ」や「問い詰めたところ、認めた」のように、文法的な意味や機能を担うようにもなっています。英語でも、たとえば未来を表す助動詞のwillは、もともと「望む」という動詞でした。近接未来を指す表現でも文法化が観察されますが、be going toに関する研究は多く行われているものの、それに次いでよく使われるbe about toはほとんど手つかずの状態でした。そこで、Watanabe (2011) ではbe about toの文法化を扱い、それが完全に近接未来表現になったのは19世紀初頭であることを、言語データや当時の辞書や文法書の記述などから明らかにしました。（この論文は日本英語学会の新人賞を頂くことができました。）

最近では、近接未来表現の出現によって英語未来表現の体系に再整理が生じたと考える、文法化とは別の観点から研究しています。渡辺 (2016) では、16世紀から19世紀に出版された英訳新約聖書に見られる訳語の変遷を辿り、もともとwill, would, shall, shouldが用いられていた文脈で、近接未来を指す各種表現に置き換わっていく様を明らかにしました。（この論文は近代英語協会の優秀学術奨励賞を頂くことができました。）この論文のデータを集めていると、今の英語に残る表現だけではなく、18世紀以前は、be ready toという結局は文法化しなかった表現が多用されていることに気付きました。さらに16～17世紀の英語に関する文献を調べると、他にもcome/go near to, upon one's doingなど、現代に残らなかった表現があることも分かりました。これらの表現の中で、残ったものと残らなかったものの違いは何か、この中からどのように近接未来表現が発達していったのか、という点がさらなる疑問点として浮かび上がってきました。幸いにも現在、日本学術振興会の科学研究費の助成を受けることができており（「近代英語期における近接未来表現カテゴリーの創発に関する実証的研究」、2016～2018年度）、目下、こうした研究課題に取り組んでいるところです。

Watanabe, Takuto (2011) “On the development of the immediate future use of *be about to* in the history of English with special reference to Late Modern English,” *English Linguistics* 28 (1).

渡辺拓人 (2016)「近代英語期訳聖書における未来表現の変遷」、『近代英語研究』第32号。

学者への道程

外国語学部英米学科教授　Joseph Tomei

I don't like to describe myself as a scholar, I prefer to call myself a teacher. In English, a scholar is "a specialist in a particular branch of study", but as a teacher, I am willing to use any branch of study, or even any activity, if it helps students learn. In fact, if you enter 'scholar' into https://images.google.com/ all the pictures are of individuals, never groups of people. Don't get me wrong, I love to be in the library among books and documents, but being with people makes me much happier.

When I started university, I majored in Music and wanted to be a professional orchestral player (Horn), but after 3 years, I changed my major to Linguistics. I then went to Europe and taught English in France and Spain. After that, I participated in the first year of the JET program. I returned to the US and did my masters in Native American languages. This may seem like the definition of a scholar, but because there are fewer and fewer of the speakers of these languages, my goal was to help them find information about their language and culture and bring it back to them. However, I met my future wife and an opportunity to teach at Hokkaido University brought me back to Japan, and after 3 years, I was offered a position here at Kumamoto Gakuen University and I have enjoyed teaching here for 20 years. One thing I love about KGU is that I can participate in clubs (I'm the faculty advisor to the aikido club) and circles (I play horn with the Green Philharmonic Orchestra) and get to know my students better. Many friends who teach in Tokyo and Osaka only see their students in the classroom, but living in Kumamoto means that I see my students not only in class, but at the Starbucks, downtown, doing part time jobs. In fact, it is hard to not meet my students! Getting a better idea of who they are and all they do is one of the best things about teaching at KGU. I hope to meet some of your students here as well!

特別記事：韓国テジョン大学との交流

「韓国大田大学への交換教授として」

外国語学部英米学科教授　堀　正広

姉妹大学である大田（テジョン）大学に赴任して３ヶ月が過ぎた。30 年を超える教員生活も最終コースに差しかかり、「教えること」、「語学教師であること」、そして「研究すること」を見つめ直してみたい。そんな思いで交換教授を希望した。

大田大学での授業は充実している。慣れない科目を教えているので準備には時間がかかる。しかし、敬意をもって接してくれる学生に、多くのものを伝えたいと、時にはヒートアップすることもあるが、楽しく授業を行っている。

英語の教師として、言葉が通じない異国での生活はどういうことかということを日々肌で感じている。英米での生活経験とは違った緊張感がある。サバイバル・ハングルを駆使しながら日常生活を切り抜けているが、今はハングルを使うことに恐れはなくなり、学ぶことが楽しい。

研究に関しては、これまで研究書や啓蒙書を書いてきたが、ほとんどが必要に迫られて出版してきたものである。研究生活の仕上げとして、自分の書きたいものを書いている。今は執筆することが楽しい。

世の中は北朝鮮の過激な行動で慌ただしい。日本と韓国に関して、報道の仕方、国民性、社会の歪み、政治と個人、学生の気質などについて日本語や英語ができる先生方と話しをすると、考えさせられることが多い。私たち日本人はもっと隣国と関わりを持つべきだと改めて思う。

学会・調査・出版等報告

International Association for Intercultural Communication Studies での発表報告

外国語学部英米学科教授　米岡ジュリ

On June 7, 2017, I had the pleasure of presenting "International Disaster Management Communication in Japan: Progress and Issues" at the 23rd International Conference of the International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS) at Macao Polytechnic University in Macao, Greater China. This study was based on personal experiences of foreign tourists and residents during the 2016 Kumamoto Earthquakes, and points out the problems of top-down, government-organized communication of information as well as bottom-up SNS-based peer-to-peer communication. Especially, the machine-translated Kumamoto City English website is pointed out as being singularly unhelpful during a disaster, and cell phone companies were lauded for their provision of 00000JAPAN wifi service and unlimited data for two months.

I have been a member of IAICS for many years, and even organized the International Conference held at KGU in 2009. It was a great delight to see many old friends again and to make new ones, including a PhD student at Kumamoto University who is also teaching part time at our university and Kumamoto Prefectural University. The world is indeed small!

編集後記

世間では、海外へ出かける日本人留学生数が減っているともっぱら評判である。しかしクマガクに関する限り、まったく当てはまらない。学術的な留学にしろ、インターンシップにしろ、ホームステイにしろ、どんどん世界各地に出かけている。学生のニーズにあった多彩なプログラムが充実している証左かも知れない。夏は、教室外で学生が一回りも二回りも大きく成長する時機である。（TK）

編集人　神本　忠光（英米学科長）

〒862-8680
熊本市中央区大江 2-5-1
TEL: 096-364-5161（代表）
Mail: kamimoto@kumagaku.ac.jp

きみと未来をつなげる
クマガク